

それでは、今朝のテキストは**マタイの福音書 22 章 34～40 節**というところになります。このテキストを読む前に、ある人に質問を投げかけることによってその人が何を考えているのか、何を一番大事に思っているのか、何のために生きているのか、ということを知ることが出来るということを、まず初めに皆さんに考えて頂きたいと思います。相手のことを理解したい。相手のバックグラウンド・背景をよく知りたい。どんな性格なのか、パーソナリティーなのか知りたいと願うならば、その人に質問を投げかけるということで意外とハッキリとその辺が分かるということ。その辺を今から皆さんにいくつかの質問を実際に投げかけますので、自問自答して頂ければ結構ですけれども、自分が何を考え、何のために生き、何を一番大事にし、価値ありとしているのか。例えば、もし無人島に 1 冊の本を持っていくことが許されているとするならば、あなたは何を持って行くでしょうか。勿論ここに集まっている皆さんは、当然聖書と答えられると思います。まさか少年ジャンプなんて言わないと思います。実際に無人島に 1 冊だけ本を持って行くことが許されるとするならば、という質問をすることによって、その人が何を考え、何のために生き、何を一番重要視しているのか、価値ありとしているのか、ということが分かります。他にもいろんな質問の仕方があると思います。例えば、あなたの家が火事になってしまいました。その時あなたはなんとか家族を連れて、そして大事なペットも連れて難を逃れたとします。まだ火の気はそれほど全体にはまわっていませんので、もう一度だけ家に戻ることが許されたとするならば、それが可能とするならば、あなたは何を取りに戻るでしょうか。大地震でも、大津波でも結構です。とりあえず自分の愛する家族、ペットたち全員退去出来た、退避出来たということで、もう一度だけ安全が保障された形で戻ることが許されているとするならば、許されたとするならば、あなたは何を取りに戻るでしょうか。または、ある藁人形があって、それに五寸釘を打つと実際にあなたが心から憎んでいる人に痛みを与えることが出来、ダメージを与えることが出来るということが(仮定の話ですけれども)実際にあり得るとしたら。そしてそのことはあなた以外の誰も知らないとするならば、あなたはそれを実際に使うでしょうか。いろいろな質問があると思うんですけれども、相手のことをよく知りたい。本当のところ一体何を考えているのか、その人は何のために生きているのか。何を大事にしているのか。その人のパーソナリティー、バックグラウンドを知るためには、質問を投げかけるというのはかなり有効な手立てだと思います。ですから皆さんもいろんな質問を今心に思い描いて頂いて、自分にも問うて頂きたいと思いますし、またお互いにも問うて頂くと、いろいろと見えてくると思います。

実際に今日テキストにしている**マタイの福音書 22 章**には、イエス・キリストに対して質問を投げかけた人たちが出てきます。3つのグループが出てきます。そして、イエスはこの時点で十字架刑にされる1週間前の段階に入っております。ご自身もそのことを充分認識していました。あと1週間で自分は、私は十字架につけられ、そして死ぬんだということ。ですからイエスにとっては地上生涯の最後の1週間を迎えたという段階であります。その時人々はイエスに向かって「ホサナ、ホサナ。」イエスを王としてエルサレムに迎え入れました。でも、イエスは知っていたんです。1週間も経てば「ホサナ、ホサナ。主の御名によって来られる方に祝福あれ。」と叫んでいるこの群衆が一変して、豹変して、一転して「除け、除け。十字架につける。」と叫ぶようになるということをイエスは知っておられました。イエスは自分が十字架につけられ、死ぬことを知っていました。ちょうど時期は、過ぎ越しのお祭りの時期であります。イエスの時代からすると、イエスの時代というのは今から2000年前ですが、その2000年前のイエスの時代からすると、さらにさかのぼって1500年も前に過ぎ越しのお祭りが初めてお祝いされました。その過ぎ越しのお祭りで成された一つ一つのセレモニー・慣習というものが、実はイエス・キリストが十字架の上で成就されるその影であった、ひな型であった、予型であったということが、ここからも見えてきます。過ぎ越しの小羊が屠られるわけですが、イエスも過ぎ越しのお祭りのまさにその日にゴルゴダの丘の十字架の上にご自身、神の小羊として屠られるわけ。イエス・キリストが過ぎ越しのお祭りを成就されたということになります。パウロもイエスのことを、過ぎ越しの小羊と呼ん

でありますし、またヨハネもイエスを、世の罪を取り除く神の小羊とも呼んでおります。過ぎ越しのお祭りの起源は、今更説明する必要はないかと思いますが、400 年間もエジプトに隷属状態となっていたイスラエルの民をモーセという解放者が救出して、脱出させて、所謂出エジプトをして、そして約束の地へと導き入れるという。そのきっかけとなったのが過ぎ越しであるということなんです。イエスもまたこの祭りを成就する者として、エジプトというこの罪の世界から私たちを解放し、そして約束の地へと導き入れて下さる解放者となって、言わば第二のモーセとなってこのことを私たちのためにも成して下さったということでもあります。同時にイエスは小羊にもなって下さって、自らの命を捧げられたお方でもあります。そして過ぎ越しのお祭りについては、**出エジプト記 12 章**に詳しくその最初の過ぎ越しのお祭りについて、またその規定について書かれております。ニサンニサンの月と呼ばれる、現代で言う太陽暦の 3 月から 4 月の 10 日にまず過ぎ越しの小羊を選ぶわけです。その小羊はシミやシワや傷やそのようなものの何一つない完璧な小羊でなければなりません。そして、そのことを確認するために 10 日から 14 日までの間、すなわち 5 日間、その小羊を家でペットのようにして飼います。パッと見ては中々気付かない点もありますから、細かく検査するために 5 日間様子を見るわけです。じっくりチェックするわけです。検査するわけです。シミやシワがないかどうか。もう隅々まで見るわけです。もしかしたら病気を持っているんじゃないか。5 日間の間で急に病気を発症したり、または急に死んでしまったら大変ですので、とにかく 5 日間事細かにチェックするわけです。欠陥があれば、次のまた新たな小羊を手に入れなければなりません。それと同じようにイエス・キリストも過ぎ越しの小羊として検査をお受けになります。5 日間ちょうど同じ時間帯にイエスもまた検査官たちからチェックを受けるわけです。その検査官というのは、とにかくイエスのあら探しをして、何としてもイエス陥れようとする。因縁を付けてはイエスをとにかく無き者にしようと試みるパリサイ人、サドカイ人、またヘロデ党の者たちでありました。でも実際のところ、このような厳しい検査官たちの検査もイエスはすべてパスして、やはりイエス・キリストはシミもシワも傷もそのようなものの何一つない小羊であるということが証明されてしまうわけです。そしてイエスは、過ぎ越しのお祭りを過ぎ越しの小羊としても成就されます。事実ローマ総督のピラトでさえ「私はこの者には、この人には、何の罪も見出さない。何の罪も認めない。」と、最低でも 3 回もピラトの口によってイエスが無罪であるということが宣言されたんです。にもかかわらず、イエスは結局十字架刑にされました。でも、それは過ぎ越しのお祭りの成就、預言の成就でもあったわけです。そして、その検査官たちの検査に今目を留めて欲しいと思うのですが、3 つのグループが実際にイエスを検査するわけです。最初のグループというのは、**マタイの福音書 22 章 15 節**を見て下さい。『<sup>15</sup> **そのころ、パリサイ人たちは出て来て、どのようにイエスをことばのわなにかけようかと相談した。** <sup>16</sup> **彼らはその弟子たちを、ヘロデ党の者たちといっしょにイエスのもとにやっ**て、こう言させた。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方だと存じています。あなたは、人の顔色を見られないからです。』ここにパリサイ人とヘロデ党という 2 つのグループが出てきていますが、本来この 2 つのグループは対立し合っておりました。でも、共通の敵であるイエス・キリストを見出したことによって彼らはつるむわけです。結託するわけです。手を組むわけです。共通の利益があります。イエスは目障りだったんです。目の上のたんこぶのような存在だったんです。パリサイ人にとってもヘロデ党にとってもです。パリサイ人というのは、実に律法に厳格な者たちで、当時はユダヤ人たちの多くの支持を受けていました。ヘロデ党というのは、ヘロデ王家の再興を願ってローマに与<sup>くみ</sup>する者たち。ローマ帝国に積極的に協力してローマ帝国に税金を納めることにも賛成して、むしろ奨励しているようなグループでありました。ですからユダヤ人たちの多くからは嫌われていたわけです。“ローマの犬”と呼ばれるような連中でありました。ですから、パリサイ人とヘロデ党というのは相容れないグループだったわけです。まるで正反対のようなグループだったんですが、ここではイエスをめぐって仲間になっているわけです。手を組んでいるわけです。そして、そこで彼らがイエス陥れようとして協力して、そしてイエスに検査をかけようとするわけです。ここで続きを見たいと思います。『<sup>17</sup> **それで、どう思われるのか言ってください。税金をカイザルに納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。**』カイザルというのは、シーザー、ローマ皇帝のことです。これは政治的な質問であります。当時は、イスラエルでは最も関心のあった質問であります。消費税が 10%になりますかどうか、とかそういう話です。今で言う一番ホットな話題

と言いますか。その中で、もしイエスが「そうだ。カイザルには税金を納めるべきだ。」なんというお答えをされれば、大半のユダヤ人からは猛反対を受けます。本来彼らは出エジプトをして約束の地に、(イスラエルというのは約束の地です。)そこに導き入れられていたはずなのに、ローマ帝国という他国の支配者によって圧政の中で苦しみ、そしてまた出エジプトの前に戻ってしまったような状況に陥っているわけです。「神の約束は一体どうなったのか。我々は自由になったのではないか。どうして約束の地に入っているのに、他国の支配者に税金を納めなければいけないのか。ここは私たちの国ではないか。何かおかしい。」そんな多くの一般の会衆の考えが支配的でありましたので、イエスが「カイザルに税金を納めるべきだ。」なんて言ったら、大変な騒動になることが予想されるわけです。また、カイザルは、ローマ皇帝は、自らを神とみなすような者でありましたので、もしカイザルに税金を納めるなんていうことになれば、これはカイザルを神と認めるといような発言にも繋がります。ユダヤ人たちは、神殿に神殿税という税金を払っていました。それは神に捧げるという形でありましたので、カイザルに税金を捧げるという事は、カイザルを神とみなすような、偶像礼拝に繋がるような大きな罪だと、そんなふうな認識もされかねません。ですから、どっちみち大変な騒ぎです。または、イエスが「税金を払うべきではない。」というふうなお答えをされた場合、完全にローマ帝国に牙をむいた反逆者である。これは政治犯というみなされ方をして、即刻その場で通報されて、逮捕されて投獄されると。畏であります。

でも、興味深いことにイエスの答えを見て欲しいと思います。続きであります。18節『<sup>18</sup> イエスは彼らの悪意を知って言われた。「偽善者たち。なぜ、わたしをためすのか。<sup>19</sup> 納め金にするお金をわたしに見せなさい。」そこで彼らは、デナリを一枚イエスのもとに持って来た。』興味深いことにイエスは、この1デナリという1枚の硬貨をご自身手にしていませんでした。持っていなかったんです。持ち合わせがなかったんです。1デナリというのは1日の給金です。平均労働者の、大体平均賃金です。それをイエスは持っていなかったんです。もし持っていればポケットから自分で出して見せたと思いますが、そこは何故興味深いかと言いますと、イエスは金持ちでなかったということです。ポケットにじゃらじゃら、ここでデナリは1日の賃金に相当するぐらいですから、1万円札みたいな感じかもしれません。1万円札もイエスのポケットには入っていなかったんです。ある人たちにとっては、これは重要なことだと思います。ある人たちというのは、所謂『**繁栄の神学**』というものを説いている人たち、説いているグループ。「クリスチャンは金持ちにならなければいけない。もっと捧げれば捧げるだけ神様から見返りが来る。献金しなさい。そうすればあなたの経済も繁栄します。成功します。」でも、イエスには1デナリもなかったということを知ってみたいと思います。イエスは決して金持ちではありませんでした。

そして、その後のイエスの応答は、まさに名答であります。20節『<sup>20</sup> そこで彼らに言われた。「これは、だれの肖像ですか。だれの銘ですか。」<sup>21</sup> 彼らは、「カイザルのです。」と言った。そこで、イエスは言われた。「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」<sup>22</sup> 彼らは、これを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。』完全に口が塞がれてしまいました。あまりの名答に、もう言う言葉がありません。為す術がありません。ここでイエスが言われた言葉に注目して下さい。「これは、だれの肖像ですか。だれの銘ですか。」英語の聖書ではこの部分を「**誰のイメージか。**」というふうに訳していますが、そのように皆さんにも今考えて頂きたいと思います。もしそれがカイザルのイメージであるならば、それはカイザルのものだからカイザルに返しなさい。ここで皆さんに考えて頂きたいことは、「**あなたは誰のイメージですか。**」ということです。あなたは誰のイメージですか。福沢諭吉でしょうか。樋口一葉でしょうか。ここで自分たちは、私たちは、誰のイメージなのか。私たちは神のイメージに、神の肖像に、神のかたちに造られたものです。神の銘が、造られたものである私たちには刻まれております。であるならば、私たちは自分自身を神に捧げるべきであります。自分の持てるものはこの方に捧げるべきであります。勿論税金は税金として政治的な責任というものがあります。霊的な責任というものもあります。その辺は混同すべきではありません。深い深いイエスの名答であります。

そして、次のグループがやってきました。マタイの福音書22章23節。第二の質問がイエスに浴びせられます、投げかけられます。『<sup>23</sup> その日、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来

て、質問して、言った。』このサドカイ人というのは、エリートの階層で裕福であります。パリサイ人はどちらかというと中流階級です。サドカイ人たちはここで神学的な質問をイエスに浴びせます。彼らはちなみに天使も奇跡も復活も信じていません。彼らは所謂『モーセ五書』と呼ばれるトーラー、律法の書しか信じていません。その律法の書、創世記から始まりモーセ五書ですから、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記、この五書。その中には天使だとか復活だとか、また奇跡だとか書いていないと。それは勝手な解釈で、本当はいっぱい書いてあるんですけども。律法、法律だという見なし方をして、彼らはその五書だけにこだわって、実際に天使、奇跡、復活といった目に見えないような現象、超自然的な事柄については一切懐疑的であったわけです。パリサイ人たちはすべて文字通り信じていました。そのようなサドカイ人たちが今度はイエスにチャレンジします。面白い質問です。24節のところに『先生。モーセは『もし、ある人が子のないままで死んだなら、その弟は兄の妻をめぐって、兄のための子をもうけねばならない。』と言いました。』モーセの律法に書いてあります。申命記25章に実際に規定があります。レビラート婚、<sup>あによめこん</sup> 嫂婚制度というもので、跡継ぎがない場合、弟が独身だった場合は弟が<sup>あによめ</sup> 嫂と結婚して死んだ兄のために息子を設けなければならないという制度があったわけです。かつて日本にもありました。25節のところで『<sup>25</sup>ところで、私たちの間に七人兄弟がありました。長男は結婚しましたが、死んで、子がなかったで、その妻を弟に残しました。<sup>26</sup>次男も三男も、七人とも同じようになりました。(もし私が7人目の夫だったらちょっと考えると思います。毒でも盛られているのではないとか、いろいろ考えますけれども、疑ってしまいますが、ここでは忠実に7人とも結婚して、27節に)<sup>27</sup>そして、最後に、その女も死にました。(結局、子がなかったわけです。)<sup>28</sup>すると復活の際には、その女は七人のうちだれの妻なのでしょう。彼らはみな、その女を妻にしたのです。』これに対するイエスの応答はやはり名答であります。29節。『<sup>29</sup>しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです。』サドカイ人たちは裕福な人たちだと言いましたが、彼らは祭司の階級でもありました。サドカイ人の中から大祭司だとか、祭司長だとか、祭司と呼ばれる神殿で実際に仕える人たちが出てきたわけですが、そんな彼らに対して、宗教家に対して「あなたがたは、聖書も神の力も知らないのだ。」と、イエスは断言しました。『<sup>30</sup>復活の時には、人はめとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。<sup>31</sup>それに、死人の復活については、神があなたがたに語られた事を、あなたがたは読んだことがないのですか。<sup>32</sup>『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』とあります。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。』<sup>33</sup>群衆はこれを聞いて、イエスの教えに驚いた。』この32節のカギ括弧の中も出エジプト記3:6の引用であります。これもやはり『モーセ五書』、トーラーですから、サドカイ人たちが実際に支持しているものであります。支持しているにもかかわらず彼らは、聖書読みの聖書知らずであったわけです。神の力も全く分かっていない、皮肉な宗教家たちでありました。ここでイエスが引用された言葉、もう一度32節を見て下さい。『わたしは、アブラハムの神』とありますが、正確に訳しますと『わたしは、アブラハムの神である。わたしは、イサクの神である。わたしは、ヤコブの神である。』アブラハム、そしてその息子がイサク、そしてその息子がヤコブです。お爺ちゃんから始まって息子、孫と代々に<sup>わた</sup>亘ってイスラエルの神は彼らの神である、とあります。あつた、ではないのです。「わたしは、アブラハムの神だつた。」とは書いてありません。そこに注目すべきであります。もし「アブラハムの神だつた。」という言い方になっていけば、アブラハムはもう死んだということです。もう生きていないという意味です。でもここでは「アブラハムの神である。」もう死んでいるのに。そして「イサクの神である。」イサクも死んでいるのに。そして「ヤコブの神である。」これを語ったのはモーセに対してですから、モーセよりも遙か前の時代の人たちのことを言っているわけです。モーセよりも遙か前の時代に生きた、もう既に死んでいたはずのアブラハム、イサク、ヤコブ。彼らは死んでいるはずですから、通常であれば「私はアブラハムの神だつた。私はイサクの神だつた。私はヤコブの神だつた。」という話になるわけです

が、でも神はモーセに対して「私はアブラハムの神である。なぜならばアブラハムは今も生きているからである。」実際にアブラハムは死んで、そして『アブラハムの懐』<sup>ふところ</sup>というところ。言わば天国の待合室のようなところに行っていたわけです。そこに生きているんです。聖書にそう書いてあるんだと。なのにあなただけが復活を信じないと言っている。おかしい話だと言っているわけです。天においては人はめとることも、とつぐこともないと。私たちは皆キリストの花嫁とされます。その話をするとう脱線してしまうので、次の質問に今度は目を移して頂きたいと思います。

第3番目の質問です。これこそが今朝皆さんに強調してお伝えしたい、フォーカスしたい質問でもあります。34節以降になります。『<sup>34</sup>しかし、パリサイ人たちは、イエスがサドカイ人たちを黙らせた<sup>と聞いて、いっしょに集まった。</sup><sup>35</sup>そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。』彼らのうちのひとりの律法の専門家、ということですからまさに彼らの代表ということです。最高峰ということです。これ以上ない優秀な対抗馬ということです。この人ならばイエスを陥れることが出来るだろう。ギャフンと言わせることが出来るだろう。罠にかけることが出来るだろうと、代表を選んだわけです。律法学者、律法の専門家です。モーセ五書などはほとんど暗記しているようなエキスパートであります。面白いことにそのような律法の専門家が、今日で言うところの法律家がイエスという大工の息子に律法の、法律の質問をするんです。面白いですね。法律の専門家が大工の息子に法律について質問するわけです。よく考えればおかしい話ですけども、当時ユダヤ人たちはモーセの律法というのは全部で613あると考えました。613の戒めが書かれていると、彼らは結論付けました。613の内の248は、これは積極的な命令である。例えば、〇〇すべきである、というものです。残りの365は否定的な命令。〇〇すべきではない、というものと解釈しました。面白いことに1年は365日ありますので、毎日毎日すべきではない戒めが、命令があるということを彼らは強調したかったと思われまます。その中で最も大切な戒めはどれなのかという質問を投げかけるわけです。36節以降読みます。『<sup>36</sup>「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」<sup>37</sup>そこで、イエスは彼に言われた。(これは名答でもありますが、完全なる正答であります。正しい答えです。)<sup>38</sup>『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』<sup>39</sup>これがたいせつな第一の戒めです。<sup>40</sup>『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。』<sup>40</sup>律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。』ここで止めておきます。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』、この部分は『**シエマの朗誦**』として知られる部分です。皆さんの週報にもその箇所を記しました。申命記6章4節以降が特にその箇所になっています。この“シエマ”というのは『**聞きなさい、イスラエル。**』のその冒頭の言葉の『**聞きなさい**』であります。ヘブル語で『**聞きなさい**』のことを“シエマ”と言います。朗誦するというのは、この『**シエマの朗誦**』をユダヤ人は朝夕毎日2回唱えるんです。そして、その『**シエマの朗誦**』を書き込んだ紙をメズサーと呼ばれる小さな円筒形の入れ物に入れて、必ずユダヤ人の家庭の玄関先、そして各部屋には、それらが身に着けられています。詳しくは、ここに『**主の門に入れ**』という本がありますので、参考までに教会図書にありますから、どんな形なのか、どんなふうにつけられているのか、後で写真とか絵で見ることが出来ますので、確認をしてみてください。その中でユダヤ人たちは、とにかく文字通りこの“シエマ”という箇所をそれぞれの家の門柱に付けたわけです。メズサーという、これはまさに門柱という意味で、部屋の門柱、バスルームの門柱、トイレだけはつけていないんですけども、各部屋に敬虔なユダヤ教徒であるならば、この“シエマ”を入り口に付けているわけです。その入り口を通る度に、玄関を出入りする度に彼らはそこに手を触れたり、口づけをするわけです。毎回毎回です。それだけ意識するわけです。そして他にも皆さんの週報にも記していますが、その『**シエマの朗誦**』というもののの中に実際にこれを額と手に身に付けるようにというふうに書かれております。これはエフィリオンというユダヤ人たちが今も使っているものであります。これについても先程紹介した本の

中に書いてありますので、なかなかイメージがつかないものはそれを見てみて下さい。昔の山伏みたいな頭につける、ハチマキに小箱が付いているような格好になっています。それらのやはり小箱の中にも“シエマ”の箇所が入っているわけです。朝夕祈りの度にそれを今も敬虔なユダヤ教徒たちは身につけます。それほど彼らはこの“シエマ”を大事にしたわけです。毎日毎日唱えるべきもの。毎日毎日意識すべきもの。実にそれがユダヤ人にとっての信仰の中心点でもありました。

聖書は分厚い本ですから中々取っ付きにくいという人もいるかもしれません。難しすぎる、複雑怪奇だと。こんなに分厚いものをどこから読んだらいいのですか、と迷ってしまう人もいます。でもその難しすぎると思われる聖書を、ここでは簡略化して、ダイジェスト化して、まとめて要約化しているわけです。シンプルに、613もの戒めがあるんですが、ここではたった2つに絞られています。面白いことにユダヤ人たちは613もの戒めをダビデという人が11にまとめたと考えました。参考までに詩篇15篇を開いてみて下さい。ダビデの賛歌とあります。『<sup>1</sup>主よ。だれが、あなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。<sup>2</sup>正しく歩み、義を行い、心の中の真実を語る人。<sup>3</sup>その人は、舌をもってそしらず、友人に悪を行わず、隣人への非難を口にしない。<sup>4</sup>神に捨てられた人を、その目はさげすみ、主を恐れる者を尊ぶ。損になっても、立てた誓いは変えない。<sup>5</sup>金を貸しても利息を取らず、罪を犯さない人にそむいて、わいろを取らない。このように行う人は、決してゆるがされない。』613もの戒めをダビデは11に簡略化した、要約したと彼らは考えました。実際に時間がないので一つ一つこの中から11項目取り上げることができませんが、皆さんも容易に数えることが出来ます。ここに11の命令・戒めが列記されています。正しく歩み(1つ目)、義を行い(2つ目)という形で数えることが出来ます。後で数えてみて下さい。それでも中には「折角613から11に絞られても、11も多すぎる、まだ難しすぎる。」と言う人のために、ミカ6:8で3つに預言者ミカは絞ったとそのようにユダヤ人たちは考えました。『<sup>8</sup>主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない(1つ目)、誠実を愛し(2つ目)、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。(3つ目)』と。これが聖書の律法の要約であると。旧約聖書では613ものモーセの戒めは、3つにまで絞られたわけです。

それをイエスは2つにさらに絞ったわけです。1つはシエマの朗誦の中の最重要部分、これが律法の中でも最も大切な戒めです。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』神様を全存在をかけて、全身全霊をもって愛しなさい、という命令です。この“知力”という部分は、“力”というふうにも言われる部分ですけれども、ユダヤ人たちはこの“力・知力”の部分を“お金”というふうにも解しました。お金を尽くして、財力を尽くして、というふうにも解したわけです。勿論財力も含めるわけです。全存在をかけてということです。持ち物すべてをもって神様を愛しなさい。これが大切な第一の戒めであると。

もう一つが、これはシエマの朗誦とは全く別の箇所です。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』これはレビ記19章18節からとられています。イエスは聖書の要約というものをこの2つの聖句によってまとめ上げました。2つとも共通していることは、「愛する」ということです。イエスが言わんとしていることは、「愛する」ということです。

ここで皆さんにも考えて頂きたいことがあります。神様はこのことを私たちにも、ここにいる皆さんにも求めておられます、願っておられます。あなたの愛をこの方は心底求めておられます。中々愛と言われてもよく分かりません、と言う人もいるかもしれません。いろいろな愛というものがあります。ここで区分けしたいと思います。愛というのは、所謂デートすることとは違います。今日は日曜日です。ある人たちにとっては、この礼拝に集うことは神様と日曜日にデートすることのように思われているかもしれません。でも実際に神様は私たちとの“日曜デート”を望んでいるのではないのです。神様は私たちに、心を

尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、全部をもって、全存在をかけて、全生涯をもって愛して欲しい。そのことを望んでいるわけです。日曜日だけデートする。それだけを求めているわけではありません。でも、残念ながら多くのクリスチャンたちは、日曜礼拝に集うことで神様は満足されているのではないかと思っているわけです。勿論デートそのものを悪いと言っているわけではありません。特にクリスチャンの夫婦であるならば、クリスチャンの夫婦でなくても結構ですけども、すべての夫婦にお勧めしたいと思います。子供がいる夫婦には特にお勧めしたいと思います。必ず夫婦で2人の時間を持って欲しいと思います。週に1回は2人きりでデートして欲しいと思います。それは夫婦の愛を育むには必要なことだと思います、重要なことだと思います。でも私たちはここで神様との関係を考える時に、神様は私たちとのデートを必ずしも望んではいないということです。デートどころか、心を尽くして。英語の聖書では **with all your heart** あなたのすべての心をもって、ということです。すべての心です。心の一部ではありません。全部の心です。部分的にではなくて、全部を求めています。心の全部です。思いの全部です。力の全部です。それをもって神である主を愛せよと。神はそのような愛を私たちから望んでいます。「日曜日だけほんの2・3時間、神様とのデートをする。それを神様は望んでおられる。日曜礼拝を神は望んでおられる。」と思ったら大間違いです。例えば日曜日に、私と妻がデートしたとします。楽しい時間を過ごしました。そして月曜日になりました。妻は私にもものを頼んできます。お皿を洗ってとか、あれをとってとか、ゴミを出してとか。それを聞いても私は知らんふりをします。全く無視するんです。妻が私に話しかけているのに、私はあたかも妻がそこに存在しないかのように一切口を利きません。そういう日が月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、土曜と続きます。でも日曜日になったら、今日はデートの日だから急に妻と会話を始めます。どうでしょうか。それは異常な夫婦です。異常なカップルです。何かがおかしい。それでは成り立たない。でも、神との関係を考えて頂きたいと思います。私たちの何かがおかしいのかもしれませんが。週に1回だけ、日曜日だけ、またはバイブルスタディーの日だけ、私たちは神様とのデートを楽しみます。他の時間はどうなのか。心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさいと。愛し続ける必要があります。その日その時だけでは、その場しのぎではありません。その場限りではありません。ですからここで問われていることとしては、**あなたは主を愛する者なのか、それともただ主とデートをするだけの者なのか。**もしこの中に、私は主を愛する者というよりも、ただ主とデートをする者だった。そのように自覚された方がいらっしゃるならば、今すぐこの場で悔い改めて頂きたいと思います。これは一番大切な戒めです。一番大切な戒めを破っているならば、即刻この場であなたは悔い改める必要があります。心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、神様を愛するという事は、神のために生きるということです。神との関係を全生活の最優先事項にするということです。主こそあなたの愛の対象です。主こそあなたが一番大切にしているお方であるはずであります。

そして**39節**のところに『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という**第二の戒め**も、それと同じようにたいせつです。とあります。“同じように”という言葉は非常に興味深い言葉で、これは第一の戒めとリンクしている、繋がっている、コネクトしているという意味合いで使われます。第一の戒めと第二の戒めは、全く別個のかけ離れたものではなくて、別々のものではなくて、この**申命記6:4**も**レビ記19:18**も、これも同じ、繋がっている、リンクしている、コネクトしているのだというのが、“同じように”という言葉であります。つまり神を愛する者は、隣人を愛する者であるという意味です。シンプルな意味であります。隣人とは一体誰のことですか。そんなに難しいことではありません。隣の人のことです。難しく考えないで下さい。隣人というのは聖書的には、いつでもどこでもあなたの近くにいる人、あなたの周りにいる人たち。それが全て隣人です。中にはあなたの家族もいれば、職場の人もいれば、全くの赤の他人。敵もいるかもしれません。それらすべて漏れなくあなたの周りにいる人は、全員隣人であります。

『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』それは無理です。だって私は自分を愛していないから。

自分のことが大嫌いなんです。隣人を愛するには、自分自身のように愛せよとありますから、まず私は自分を愛することから始めなくてはなりません。自分を愛せない人は、隣人を愛せるはずがありません。」などという間違っただけの非聖書的な教えが教会の中にも蔓延しております。これは何度も皆さんにはお伝えしてはいますが、ここには“自分自身を愛しなさい”などという命令は1つも書かれておりません。あたかもそれが大前提であるかのように、まさに大前提として『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。イエス・キリストは、私たちが、誰もが自分を愛していることを大前提としてこのことを語っています。隣人を愛しなさい、というのが命令であって、自分を愛しなさいとは書いてありません。むしろ聖書では、自分を愛する者というのは、これは罪であるということも書いてあります。自分を愛していることは自明のことである。今朝皆さんは自分の髪の毛を解いたでしょうか。歯ブラシで歯を磨いたでしょうか。朝ご飯を食べてきたでしょうか。何を着ようか、考えてきたでしょうか。常に自分のことを考えています。それはあなたが自分を愛している証拠であります。自分のことをケアしています。それは自分を愛している証拠であります。私たちはとにかく自分に囚われています。何でも自分、自分、自分。私は、私の、私にとか。そのように私たちは、年がら年中自分を愛して、自分に執着しています。

では、自殺する人とか、リストカットする人とかは一体どうなんですか。彼らこそまさに自分を愛している者の究極であります。実際に自殺する者たちは自分のことしか考えていません。もし自分が自殺するならば、家族が、友人知人周囲の人たちが、どれほど傷つくのか、どれほど悲しむのか。もしそのことを考えていたならば、自殺は出来ないはずで、そして、結構自殺するという事は面倒なことです。人に迷惑をかけるんです。遺体の処理があるわけですから。そういうことも加味して、いろいろ考えて自殺する人もいるかもしれませんが、でも結局考えていることは自分の絶望感。ただ満足を与える。生きていてもしょうがないから。自分の悲しみ、自分のトラブル、それに自分が解決をもたらす。罪責感を自殺することによって処理する。自分のメッセージを伝えるために自らの命を断つとか。とにかく自分の状況をなんとか自分でしょうという、そのような自分のことしか考えていない者の究極の行動。これが自殺であります。リストカットも同じです。自分がとにかく淋しいわけです。自分が辛いわけです。そのことをアピールしたいわけです。彼らが深い傷み、悲しみ、悩みの中にあることは、勿論認めております。彼らには助けが必要であります。見下しているわけでも、見下しているわけでもありませんが、でもそれが事実なんです。自分を愛する者の究極の姿が、自殺するという行動であります。いずれにしても、私たちが自分を愛していることは、これは否定の出来ない事実でありまして、イエスはそれを大前提としております。ですから「隣人をあなた自身のように愛しなさい。」というのは、まさに自分自身を愛するように、年がら年中自分のことばかり考えているように、隣人のことも考えてあげなさい。自分をケアするように、隣人のこともケアしてあげなさい。間違っても「私は自分を愛していないから、まず自分を愛さなければ隣人を愛せない。」などという神を除いた心理学の影響を受けて、そのような教えに惑わされないで欲しいと思います。「自分をまずは尊重しなければいけない。」セルフ・エスティームだとかは、これはまさに聖書の教えからは逆行するものであります。自分を愛する、それは自己中心。そして、自己中心は他者のことを思いやることはなくなっていくます。

実際に**第一ヨハネ 4：20**も見て頂くと、イエス・キリストが、神を愛することと隣人を愛することを繋げられた、リンクした、コネクしたということが分かる箇所があります。『**20 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。**』神を愛するということと兄弟姉妹を愛するということを繋げて、コネクしています。ヨハネは愛の使徒と呼ばれる者で、ヨハネの福音書の中でこのヨハネは自らを“**イエスに愛された者**”、“**愛される弟子**”というふうで紹介しております。イエスの教えを忠実に受け継いでいます。私たちの間



題は、この神を愛するというのと隣人を愛するというのを、これを繋げないで、同じに考えないで、切り分けて考えてしまうという点にあります。日曜日は神様を礼拝します。神様を愛します。でも月曜日は仕事に行って、上司を疎ましく思います。部下を怪訝(けげん)そうな顔で見下げるように見たりします。同僚に対しては腹を立てます。隣人なんて愛していません。でも、もし神を愛しているならば、あなたは隣人も愛さなければなりません。そしてこれらは常にリンクしなければいけない、コネクトしなければいけない。そうでなければ、あなたの言う愛というのは、実にアンバランスであるということです。

テキストに戻って頂きたいと思いますが、**マタイ 22 : 40** のところ『**40 律法全体と預言者とが** (この言い方は、聖書全体という意味であります。特に旧約聖書全体が)、**この二つの戒めにかかっているのです。**』この“**かかっている**”というこの言葉は興味深い言葉で、「**十字架につけられる、十字架にかかる**」と全く同じ言葉であります。神を愛しなさい、これは縦の関係です。隣人をあなた自身のように愛しなさい、これは横の関係です。縦軸と横軸です。イエスはこの模範であります。神を、父を愛しました。ゲッセマネの園での祈りを思い出して下さい。3度も祈りました。「父よ、できますならばこの杯を私から過ぎ去らせてください。しかし、私の願うようにはなく、あなたの御心のようになさってください。」あなたの御心のようになさってください。神様を愛しているがゆえにです。自分の考え、自分の願い、夢、願望、欲望ではなくて、あなたの考え、あなたの計画、あなたの意志、それを優先します。イエスは、心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、この神を愛しました。横はどうでしょうか。十字架の上でイエスは、自分を殴り、馬鹿にし、つばきをかけ、そして鞭(むち)で打った。さらには文字通り十字架の上に釘付けにしたその死刑執行人たちのために、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、自分で分からないのです。」と祈られました。ご自身を金で裏切ったあのイスカリオテのユダでさえもその裏切りの際、ユダはくちづけをもってそれがイエスであるということを逮捕しに来た者たちに知らせたわけですが、その際にイエスは、勿論ユダがご自身を裏切ること、売り渡すことを知った上で「友よ、何のために来たのですか。」とユダに対して語りかけました。「この裏切り者め。どの面さげて」なんていうことは言いませんでした。「友よ、何のために来たのですか。」全て分かった上で、ユダに向かっても「友よ」と呼びかけるお方です。そこではユダに対して最後の最後のギリギリいっぱいまで悔い改めのチャンスをイエスは与えたわけです。勿論イエスはユダがそのチャンスをすべて無駄にして、そして自ら命を断って、自らのところに落ちていくことも知った上でありましたけれども、それでもなお最後の最後まで愛し続けたわけです。この2つの戒めは、まさに神を愛するという縦の関係、隣人を愛するという横の関係、十字架の形を浮かび上がらせるものです。この2つがすべてです。旧約聖書の全部が、この2つの戒めにかかっている。まさにそれは十字架の愛ということでもあります。その十字架につけられたのは、人となられた神の子イエスであります。イエスは父を愛し、隣人を愛し、そしてすべての律法を、613もの戒めを完璧に成就されました。それは素晴らしい。イエス・キリストは確かに素晴らしい。3つの質問に対して検査官たちの厳しい検査にも名答をもって、正答をもって見事に答えられた。素晴らしい、賞賛に値する。でも、ここで皆さんの中に、もしかしたら疑問を抱いている人もいるかもしれません。「なぜ私は神を愛さなければならぬのでしょうか。どうして私は神を愛すべきなんですか。デートではダメなんですか。こうして毎週日曜日、神様とデートするだけでは、教会に通うだけでは不十分なんですか。1日の内、何回か神様を認識するだけでは不十分なんですか。せめて食前の前に感謝のお祈りをする。それだけで良いのではないですか。それでもクリスチャンとして充分ではないですか。良い人だったら、親切な人だったら、それで良いじゃないですか。それ以上何を。」と言う人もいるかもしれません。なぜ神様は私たちから愛を望まれるのか。心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、そこまでして。また、隣人をあなた自身のように愛せよと。なぜそのような愛を望まれるのか。この愛は切っても切り離せないものです。

パウロという人が**ガラテヤ 5 : 14** でこのように表現しました。『**14 律法の全体は、**「あなたの隣人をあな

た自身のように愛せよ。」という一語をもって全うされるのです。』一語をもって全うされる、とあります。これをイエスが言われた神を愛するという人と人を愛するということを繋げて、一語というのはまさに「愛する」ということです。もし、あなたが隣人をあなた自身のように愛するならば、それだけであなたは立派な律法学者・聖書学者であります。この言葉を知っているだけでは勿論不十分です。イエス・キリストは十字架につけられるその直前にこの大切なことをまさに遺言のようにして私たちにも語られましたが、パウロもそのことをしっかりと汲み取って、愛するということ、これがすべてである。

ヨハネという人も愛の使徒としてそのことを十分に認識して、理解して、そしてそれを実践した人でありました。ヨハネに関しては、伝承に彼の晩年が記されております。福音書には、また新約聖書には特別ヨハネの晩年について詳しくは書いてありませんけれども、時の皇帝のドミティアヌスという人は、クリスチャンを迫害する皇帝ネロにもまさる者であって、最後の使徒であった、最後の生き残りであったヨハネを憎んで、そして沸騰する油釜の中に彼を投げ入れて無き者にしようと試みました。ところが90歳にもなっていた老人のヨハネは火傷1つ負わず、結局生き残ってしまったわけです。それを恐れたドミティアヌスは、自分から一番遠いところにヨハネを島流しにしました。それがパトモス島というところです。そこでヨハネはイエス・キリストとこれまでにないほどの親密なりアルな出会いをしました。その時に黙示録が書かれたわけですが、ドミティアヌス帝が死んでからヨハネはパトモス島から帰還が許されて、そして教会を巡ってメッセージを頼まれていました。そのことが初代教会教父、チャーチ・ファーザーと呼ばれる人たちによって記されているんですけれども、このヨハネはもう100歳を超えていました。かつて最後の晩餐の席、過ぎ越しのお祭りの食事の最後の晩餐の席では、イエスの胸に寄りかかったような、そんな特別な使徒であります。特別にイエスの愛をよく感じ取っていた、そんな使徒でありました。その最後の生き残りの使徒のメッセージを聞きたいとして、沢山の人が世界中から彼の集会には集まってきたわけです。会場はいっぱいです。誰もがヨハネから物凄い深い深遠な神学的なメッセージを聞かせてもらえるだろうと思って期待して集まったわけです。そこでヨハネは一言だけ「小さな子どもたちよ。互いに愛し合いなさい。」と言った途端、彼は壇上から降りて座ってしまったということが初代教会の教父たちの記録に残っております。人々はその一言では不十分だと思って「もっとヘビーなメッセージをして下さい。」とせがんだわけですが、それ以上ヨハネは語らなかつたそうです。いつも毎回ヨハネのメッセージは一言だけ「小さな子どもたちよ。互いに愛し合いなさい。」ヨハネの様々な経験、神学的な知識、特別な黙示録のような啓示。それらを集大成して一言だけ、それらが1つのフレーズに収まったわけです。「小さな子どもたちよ。互いに愛し合いなさい。」パウロと同じであります。この愛以上に重いものはありません、大切なものはないということです。

どうして愛さなければいけないのか、という話に戻したいと思うのですが、第一ヨハネの方にそのヨハネの書いた手紙があります。第一ヨハネ4:9~11を読みます。『<sup>9</sup>神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。<sup>10</sup> 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。<sup>11</sup> 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。』19節。『<sup>19</sup> 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。』なぜ愛さなければいけないのか。理由は簡単です。神がまず私たちを愛してくださったからです。どれほどまでに愛されたのか。言うまでもありません。神がひとり子を与えるほどにあなたは愛されております。ですから、この神を愛することは当然のことです。なぜ愛さなければいけないのか。愚問です。「なぜ日曜日だけのデートではいけないんですか。」そんなことは、口に出してもいけないようなことであります。ひとり子を与えるほどにあなたは愛されているんです。感謝がない人は、この神の愛がどんなに尊いものか、どんなに大きな犠牲を伴う偉大なものなのか、全く分からない無

知な者は、それで満足しようとします。でも彼らはただ無知なだけではなくて、愚か者です。全然分かっていません。そしてもっと言ってしまえば、気が狂っているとしか言いようがありません。神がそこまであなたを愛しているのにあなたは「デートで充分です。教会に通うだけで充分じゃないですか。」あなたのためにすべてを捧げられたお方が、あなたを愛して止まないのです。あなたのために罪の罰を身代わりに受けて下さったんです。実際にあなたの代わりに死んで下さったんです。それなのにあなたは「なぜ愛さなければいけないんですか。心を尽くして、思いを尽くして、知力を尽くして、全存在をかけてそこまで愛さなければいけない。納得いきません。そんな時間はありません。そんな暇はありません。日曜日だけで充分じゃないですか。」考えられないことです。そのようなことを口にする者、考える者は、全くの愚か者です。恩知らずもいいところです。感謝を全く持っていない人です。常軌を逸しています。気が狂っている。そこまでハッキリと伝えたいと思います。それが事実だからです。あなたの命の恩人、それ以上の方です。なのに、あなたは自分のことが最優先。

最後に、それは確かに簡単なことではありません。マタイの福音書 5 : 43~48 を読んで終わりたいと思います。最後にこのことを皆さんに、自分にあてはめて適用して頂きたいのです。ただ学びました、情報として知りました、勉強しました、ではなくて、これを自分にあてはめて適用して頂いて、実践して頂きたいのです。『<sup>43</sup>『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。<sup>44</sup>しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。<sup>45</sup>それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。<sup>46</sup>自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。<sup>47</sup>また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。異邦人でも同じことをするではありませんか。<sup>48</sup>だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。』愛について考える時には、また自分が本当に愛の人かどうか判断するためには、愛しやすい人ではなくて、愛しにくい人、愛しづらい人、自分が最も傷つけられた人のこと、痛めつけられた人のこと、自分を捨てたような人、自分をいじめた人、虐待した人、自分が最も嫌っている人、憎んでいる人、恨んでいる人です。出来れば、この地上から消したいとすら思うような人。その人ことを考えてみて下さい。彼らに対してどういう思いを抱いているのでしょうか。憎しみでしょうか、怒りでしょうか、苦々しさでしょうか、恨みつらみでしょうか。死んでもらいたい、見たくもない、それがあなたの心にあることであるならば、それがあなたの心の姿勢・態度であるならば、あなたは愛のない人であります。でも聖書は、『**あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。**』と言っています。愛しているつもりでも、愛しやすい人はいくらでも愛せます。多分この教会に集まっている隣の人については、周りの人については、何の問題もなく愛せると思います。でも、愛しにくい人についてはどうでしょうか。もしかしたら私たちは自分の中である程度満足してしまっているかもしれません。仲の良い人たちと、気の合う人たちと、教会の仲間と、いつもつるんでいれば、一緒にいれば、自分は愛の人だと思しやすい、思い込みやすいですけれども、でもそうでない人たち、苦手な人たち、むしろ死んでもらいたいとすら思うような人たち、正直考えてみて下さい。愛しにくい、愛しづらい人たち、彼らと一緒にいる時のあなたの心はどうでしょうか。愛で満ちているのでしょうか。それがあなたの愛を測る秤であります。頭の中に思い当たる人がいるのでしょうか。頭にきている人、苦々しい思いをしている恨みつらみを抱いている人。その人たちはあなたの家族の中に見るかもしれません。もしかしたら、この教会の中にもいるかもしれません。職場にいるかもしれません。親戚の中や、または過去にあの時小学校であんないじめを受けたとか、親から虐待をされたとか、いろいろあると思います。でも、聖書はそこで「**あなたの敵を愛し、あなたを迫害する者のために祈りなさい。**』と。もしそうしないならば、いくら教会に足繁く通っても、バイブルスタディーに週に何度も通っても、何の

意味も価値もありません。第一コリント 13 章では、愛がなければ何の値打ちもない、何の役にも立たない、と書いてあります。愛がなければ、すべては無価値、すべては無駄なんです、無意味なんです。だからイエスは、愛が一番大切だと言っているわけです。赦すことを、愛することを選ぶということ。「でも無理です。やっぱりダメです。私の心は深く傷ついているんです。」

これは最後になりますけれども、(最後と言って長くなるのが私の特徴でもあります。皆さんはそれが悪い癖だと思っているかもしれませんが、皆さんは私を愛さなければいけません。笑) 前にも言いましたけれども、これは英語でも紹介しました。

『**I can not change my heart. But I can change my mind.** 私は私の心を変えることはできません。でも、私は私の思いを(マインドを) 変えることは出来ます。**God can change my heart. But he won't change my mind.** 神は私の心を変えることが出来ます。でも、神は私の思いを変えることはなさいません。(なぜならば神様は私たちの自由意志を侵害する方ではないからです。) **But if I change my mind, God will change my heart.** でも、もし私が自分の思いを(マインドを) 変えるならば、神様は私の心を変えて下さる。』

「無理です。駄目です。不可能です。なぜならば、私の心はこんなにも傷ついているから。あんな人は絶対に愛せない、許せない、受け入れられない、生理的に受け付けないんです。駄目です、一緒の空気も吸えませんが、でもあなたは自分の思いを、マインドを変えることは出来ます。自分の心は変えることはできません。でも、神様はあなたの心を変えることが出来ます。でも、神様はあなたの思いを無理に変えることはできません。でも、もしあなたが自分の思いを変えるならば、神様はあなたの心を喜んで変えて下さいます。そのことを最後に皆さんに問いかけたいと思います、チャレンジしたいと思います。神を愛することは、隣人を愛することです。そして、その隣人の中には愛しにくい人も含まれております。愛しづらい人、とても愛せない人、絶対に許せない人、一生恨んでやる、消えて欲しい人。その人たちも含まれているわけです。**敵を愛しなさい。迫害する者のために祈りなさい。**それが出来なければ、あなたの人生は何の意味も価値もありません。どんなにあなたが自分を良く繕っても、敬虔なクリスチャンのふりをして、教会に毎週足繁く通っても、バイブルスタディーにも毎週何度も何度も出席しても、毎日聖書を勉強しても、3度3度食事の際に祈っても、何の意味も価値もありません。愛することが一番大切です。これ以外は関係ないと言って良いと思います。必要ないと言って良いと思います。聖書のすべては、この「愛する」という一語にまとめられています。神を愛することと隣人を愛することのその中にすべてが包括されています、含まれています。それ以外のものは、重要でないと言っても差し支えないと思います。そのことを是非最後に問うているわけですので、主から頂いているとして最後祈りの時間を持ちたいと思います。特にこの時間はあなたの思いの中、頭の中、心の中に全然愛せていない人、憎んでいる人、許せないでいる人、怒っている人、愛とは程遠いそういう態度をあなたが今抱いているならば、今がチャンスです。悔い改めることが出来ます。神様が望まれているような人になれます。その時間を短い時間ですけれども最後にとって、今日の礼拝を閉じたいと思います。